

民俗文化論再考

伊藤 幹治

はじめに

孤立した、小規模で、自律的な社会と想定された「未開社会」が急速な変化を遂げた結果、「未開」という概念が、人類学者のあいだでためらいながら用いられるようになってから、すでに四半世紀におよぶ歳月が流れている。現在、多くの「未開社会」は、程度の差こそあれ、国家というより大きな社会システムのなかに組み込まれ、それ自体で完結したシステムを維持することが、ほとんど不可能な状況にある〔清水 1992: 422-423〕。こうした「脱未開社会」化の状況は、社会と文化の機能的連関を強調した、機能主義人類学以降の「未開社会」研究に、大幅な視点の転換を迫ることになった〔大

塚 1995: 232-233]。その結果、「未開」の諸村落は、人類学者によって都市や国家というより大きな枠組みのなかに位置づけられ、双方の相互作用を重視する視点の設定が強調されるようになっていく[山ト 1988: 5-8, 308]。

このような傾向は、民族誌研究の現在を象徴していると考えられるが、「未開社会」を都市や国家という、より大きな社会システムの一部にとらえ、それぞれの相互関係に注目した視点は、なにも近年になって、新たに注目されたものではない。すでに一九三〇年代から、アメリカの一部の人類学者のあいだで、民俗文化論もしくは民俗社会論という形で、さまざまな議論が展開されているからである。本稿は、こうした視点に着目し、将来の新たな民俗文化論の展開をめざして、R・レッドフィールドを中心とした民俗文化論の再検討を意図したものである。

一 R・レッドフィールドの民俗文化論⁽¹⁾

1 理想型としての民俗社会

R・レッドフィールドが、民俗社会 (folk society) という概念的モデルを設定したのは、一九四二年のことであるが [Redfield 1962b]、このモデルの基礎になったのは、彼が、その一二年ほど前に公にした、メキシコのテポストラン (Tepoztlán) という村落の民族誌であった [Redfield 1930]。そのな

かで彼は、フォーク(folk)という概念を検討して、テボストラン社会を「民俗」共同体("folk" community)と規定した。

レッドフィールドによると、「フォーク」とは民間の知識(folk lore)や民謡(folk song)をもつ集団のことで、未開部族やより単純な農民は、いずれも「フォーク」の人びとであるという。彼らは伝承を共有し、その文化は記録によらず、超世代的に受けつがれ、しかも、一定の地域に限定されている。こうした認識にもとづいて、彼は、メキシコのフォークはインディアンとはいいがたい、彼らの文化は、征服された土着のインディアン文化と征服したスペイン文化が融合したもので、その背後には、数百年にわたる歴史が横たわっている、と指摘した[Redfield 1930: 1-13]。

そしてレッドフィールドは、物質文化や村落組織、分業、通過儀礼、民間医療、口承文芸などを検討して、テボストラン社会を未開部族や近代都市の中間型に位置づけ、ヨーロッパや西アジアの後進地域の農民社会とよく似ている、と考えた。その理由は、この社会が、経済的にも精神的にも自己充足的で、しかも、社会遺産が地方的で、知識がすべて対人関係をとおして伝達され、村民が古くから住みついている土地とたたかむすびついている点で、未開の部族社会と似ている、しかし、この社会が、外部の世界の一部とみなされ、また、村民が都市文明によって個人的な問題を解決をはかっている点では、部族社会とは異なっている、と考えたからである。そこで彼は、テボストラン社会を「民俗」共同体と規定したわけである[Redfield 1930: 217]。

「民俗」共同体という概念は、その後、レッドフィールドの内部で徐々に成熟し、民俗社会(folk society)という概念的モデルの構築がこころみられるが、その過程で、A・L・クロバーが果たした役割はかなり大きい。レッドフィールドがテポストラン民族誌を公にする七年前に、すでにクロバーは、文明社会と対比しながら民俗社会の属性を検討しているからである〔Kroeber 1923〕。ちなみに、この点について、当時、レッドフィールドはなにも触れていないが、テポストラン調査後に公にした『小さな社会』（一九五五）のなかで、彼は、テポストラン民族誌を書きあげてから数年ほど、はつきりした民俗社会(folk culture)や都鄙連続体(folk-urban continuum)という概念をもちあわせていなかった〔Redfield 1965: 147〕、と述懐している。

ところで、レッドフィールドのテポストラン研究には、未開(部族)社会と近代(都市)社会という二分法がかいまみられるが、クロバーは、F・テンニエスの共同社会と利益社会やE・デュルケムの機械的連帯と有機的連帯という二分法を視野に入れ、フォークと洗練(folk and sophisticate)、農村と都市という二分法を使用し、それにもとづいて民俗社会と文明社会という対極概念を設定した。彼によると、民俗文化とか部族文化は、孤立し、結束した社会に属している。こうした社会では、人びとは熟知の間柄で、親族集団が社会の基礎になっている。また、政治制度が十分、発達せず、道徳観念や宗教観念がつよい。それに対して、文明社会では、人間関係が脱人格的で、個人化されていて、親族集団の力がよわい。また、宗教的信仰も衰微し、合理化や世俗化、都市化が促進されているとい

う [Kroeber 1923: 280-283]。

クローバーもまた、レッドフィールドとおなじように、民俗社会を部族社会と似たものと理解しているようであるが、とくに彼の議論のなかで注目したいのは、民俗社会と文明社会の中間に、農民社会 (peasantry) を位置づけていることである。クローバーによると、農民が市場とかかわって生活し、都市センターを含むより大きな集団のなかの、ひとつの分節を形成している点で、農民社会は、部分文化 (part-cultures) をもった部分社会 (part-societies) であるという [Kroeber 1923: 284]。この見解は、後述するように、レッドフィールドをはじめ、その後の農民社会論に決定的な影響を与えている。

テポストラン民族誌を公にすると、レッドフィールドは、メキシコ東南部の都市メリダや町ディタス、農民村落チャンコム、部族村落トゥシクという、四つの地域社会の実地調査をおこない、民俗社会と都市社会の連続的变化を追究して、この成果を『ユカタンの民俗文化』(一九四二)としてまとめたが、その議論の一部にもとづいて、彼が民俗社会という概念的モデルの特徴を提示したのは、その翌年のことであった。レッドフィールドによると、民俗社会とは、都市社会と対比される型で、しかも、知的に構築された理念型であるから、この型と正確に一致する社会はないという。そして彼は、民俗社会の特徴として、小規模性や孤立性、文字による記録の欠如、同質性、共属感覚を挙げるほか、分業の未発達や慣習化された行動様式を挙げてゐる⁽²⁾ [Redfield 1962b: 232-241]。

ちなみに、孤立性と同質性は、後述するように、レッドフィールドが民俗社会から都市社会への連続的变化の過程を検討したときに用いた変数で、彼の理論の基本概念であるが、こうした特徴を組み合わせて、民俗社会という理念型を設定したのは、レッドフィールドの思想のなかに、一九世紀末以降の社会進化論に根ざした二分法が重要な意味をもっていたからであろう。その二分法とは、すでに指摘したテンニエスやデュルケムの対立概念やL・H・モーガンのソキエタス(部族社会)とキビタス(文明社会)、H・S・メインの身分社会と契約社会のように、二つの極概念を用いて、人間社会の変化の過程をとらえようとしたもので、欧米の人類学者がしばしば用いた未開(社会)と文明(社会)という二分法も、また、レッドフィールドの民俗社会と都市社会という二分法も、モーガンの二分法の系譜をひくものといつてよいだろう。

こうした二分法の論理をつらぬくためには、「民俗」共同体のように、未開の部族社会でも、また、文明社会の中核としての近代都市社会でもない、その中間の社会をそのまま認めるわけにはゆかない。都市社会と対立し、しかも、未開の部族社会を包み込む新しい概念を設定する必要がある。レッドフィールドが、民俗社会と未開社会が孤立性と同質性という特徴を共有する点に着目して、両者を同一視し、また、民俗社会という理念型が、現実の社会とかならずしも一致するものでなく、なんらかの示唆を与えるものにすぎないとしたのは「レッドフィールド 1978:4」、彼がヨーロッパ社会の伝統的な二分法の論理をつらぬこうとしたからであろう。しかし、これで問題がすべて解決されたわけ

はない。実在としての農民社会をどのように位置づけるかという問題が、未解決のままになっているからである。

レッドフィールドの農民社会論は、クロバーの農民社会論を発展的に継承したものである。彼によると、農民社会は、孤立した民俗社会にも認められる伝統的な精神的連帯性を基盤とし、親族関係を重視しているが、交易の精神や貨幣、形式的な非人間的支配などの、文明の諸要素を生活の一部に取り入れているという「レッドフィールド 1968: 47」。その意味で、彼は農民社会を民俗社会から離脱し、発展したものと解釈したわけであるが、彼がとくに強調したのは、その文化が自律性を欠き、外部世界との接触・交流を必要とするほか、歴史をもった文明のひとつの側面ないし次元である、という点であった [Redfield 1955: 27, 1967: 25-26, レッドフィールド 1960: 4]。農民社会とその文化が、自己充足的な部族社会とその文化とちがって、地域的広がりや歴史的深さをもつ文明の一部という点で、彼はそれを都鄙連続体の中間に位置づけたのである [松本 1959: 79]。農民は、都市の住民と異なっている点で部族民と似ているが、部族民と異なっている点で都市の住民と似ていると述べているのは [Redfield 1962c: 286]、こうした視点を反映したものといつてよいだろう。

2 社会と文化の連続的变化

レッドフィールドの民俗社会論は、人間社会を民俗社会と都市社会に二分して、両者を対比させる

だけの理論ではない。民俗社会から都市社会への変化の過程を追究した連続的変論でもある。

民俗社会という理念型を設定する以前、レッドフィールドは、民俗社会と都市社会を村落と都市という対極概念でとらえ、村落から都市への連続的变化を構想した。この試みは、ユカタン半島の町デイトスと農民村落チャンコム調査を終えた翌年のことで、そのなかで彼は、孤立した未開村落もしくは農民村落が、都市というもうひとつの型へ変化する過程に着目した。そして村落と都市の特徴として、非流動的と流動的、同質的と異質的、人格的と非人格的、宗教的な信仰と行事への関心とその減少などという点を析出し、前者の型を文化、後者の型を文明ととらえた。そこで彼は、村落(文化)が都市(文明)へ移行する過程で、地域社会の流動性と異質性が増大し、人間関係が非人格化する、また、世俗化が漸次、進行して、宗教的な信仰や行事が衰微することに注目した [Redfield 1934: 64-69]。そこに、文明を高度の技術的發展や精神的達成によって特色づけられた、より複雑な文化の特殊形態とする、彼の社会進化的思想をかいまみることができる。

こうした村落と都市、文化と文明という対極概念も、その後、レッドフィールドの内部で徐々に成熟していった。そして、村落や文化は民俗社会または民俗文化に、都市や文明は都市社会もしくは文明社会という概念に置き換えられていった。ちなみに、彼の議論のなかで、民俗社会と民俗文化、都市社会と文明がしばしば同義語として用いられている [Hultkrantz 1960: 43, レッドフィールド 1978: 29]。なおレッドフィールドは、文化と文明という対極概念を提示した翌年、メキシコ社会の

変化の過程をフォークウェイズ (folkways) とシティウェイズ (cityways) という対立概念でとらえ、この社会がフォークウェイズからシティウェイズにむかって変化していると述べているが、いずれの概念も、その後、彼の民俗文化論のなかで磨きあげられることがなかった⁽³⁾ [Redfield 1962a: 179]。

レッドフィールドが、民俗文化から都市社会への連続的変化の過程を本格的に検討しはじめたのは、彼がユカタン半島の都市メリダや町デイトス、農民村落チャンコム、部族村落トゥシクという、四つの社会の調査を終えて、その成果をまとめてからのことであった。彼が当時、もつとも関心をもったのは、これらの社会のあいだに、どのような連続的変化の過程が認められるか、ということであった。そこで彼は、一方の極に孤立的な同質社会の部族村落を、他方の極に流動的な異質社会の都市を置いて、部族村落と農民村落、農民村落と町、町と都市を比較し、それぞれの社会の変数(社会や文化の諸特徴)が、一方の極から他方の極に移行するにつれて、増加したり、あるいは、減少したりすることに注目した。レッドフィールドの都鄙連続体論は、こうした着想が基礎になって構築されている。

レッドフィールドが析出した変数は一〇ばかりある。孤立性の減少や異質性の増加、分業の複雑化、貨幣経済の発達、世俗的な職業の専門化、社会統制上、組織力がよわく、影響力もすくない親族制度、非人格的な統制手段への依存の増大、インディアン系ばかりでなくカトリック系の信仰や行事に対する関心の減少、病気を道德的もしくは慣習的規則を破ったために起こると考える傾向の減少、個人に対する行動と選択の自由の付与、というのがそれである。そして彼は、これらの諸特徴を組み合わせ、

孤立性と同質性に焦点をすえて、文化の解体と世俗化、個人化という三つの社会と文化の変化のカテゴリーを設定した [Redfield 1964: 338-339]。

問題は、孤立性と同質性、解体と世俗化、個人化が、それぞれどのような関係にあるのか、ということである。この点について、レッドフィールドはつぎのように述べている。地域社会の孤立性と同質性は、いずれも独立変数である。文化の解体や世俗化、個人化は、従属変数とみなされる。孤立性や同質性を独立変数としたのは、孤立性の喪失や異質性の増大が解体や世俗化、個人化の原因になっている、というのである。また彼は、解体と世俗化あるいは解体と個人化のあいだに、共变的もしくは因果的な相関関係があるかもしれないとも述べている [Redfield 1964: 334]。つまり彼は、これらの社会と文化の諸特徴のあいだに、なんらかの規則性がひそんでいると考え、それを独立変数、従属変数、共变的・因果的相関関係としてとらえたわけであるが、こうした仮説を提示した翌年、再び文化の解体と世俗化の關係に觸れて、両者のあいだに相互依存關係があつた可能性がある、と述べている [Redfield 1962b: 245-246]。

レッドフィールドの連続的变化のメカニズムをめぐる議論は、こうした一連の変数間の關係に焦点が絞られているが、この試みは、彼の都鄙連統體論のなかで重要な位置を占めている。しかし、このことによって、問題がすべてが解決されたわけではない。世俗化と個人化が、解体と世俗化や解体と個人化とおなじように、共变的もしくは因果的な相関關係にあるのか、彼はなにも觸れていないから

である。また、諸変数の規定についても、かならずしも十分な議論がおこなわれていないからである。この点については、あとであらためて検討したい。

レッドフィールドの民俗文化論には、連続的変化の問題のほかにも、注目しておきたい点が二つばかりある。そのひとつは、民俗社会の対極にすえた都市社会（文明）を総体として理解するために、彼が大きな伝統（great tradition）と小さな伝統（little tradition）という二つの対立概念を取りあげて、両者の相関関係に注目したことである。いまひとつは、民俗社会と都市社会（文明）の構造的関連をとらえるために、道徳的秩序（moral order）と技術的秩序（technical order）という対立概念を用いて検討したことである。いずれの試みも、二分法にもとづいている点で、都鄙連続体論と共通している。

大きな伝統と小さな伝統という分析概念は、ヒンドウイズムに根ざした南アジア社会の研究によく用いられているが [Agehananda 1978; Marriott 1960; Singer 1960, 1972]、レッドフィールドは大きな伝統と小さな伝統がどのような関係にあるのか、また、前者が後者にどのような影響を与えているのか、という問題に関心をいだいた [Redfield 1962d: 302]。そして、人類学者が小社会を研究する場合、それを大きな伝統とか国家や文明のコンテクストで理解する必要があると主張した [Redfield 1962e: 303, 1967: 34]。ちなみに、彼によると、文明には内省的なごく少数者の大きな伝統と、主として非内省的な多数者の小さな伝統がある。前者は学校とか寺院でつちかわれるが、後者は、村落社会の無学な人びとの生活のなかで、それ自体が完成され、維持されている。この二つの伝統は相互依存的

で、ながいあいだ相互に影響しあつて現在に至つてゐる、というのである〔レッドフィールド 1960 : 76-78〕。

レッドフィールドはまた、大きな伝統と小さな伝統を大きなシステムと小さなシステムとしてとらえ、農村社会は、文明とよばれる大きなシステムの部分にすぎないから、これを知的エリートの社会や文化との関連において検討する必要があるとも述べてゐる〔Redfield 1955 : 28-29〕。大小の伝統や大小のシステムの対比という着想は、彼の都市社会（文明）と民俗社会という二分法から生まれたことは、あらためて指摘するまでもないが、そこに、彼が人類学と文明史の接合をめざして、二つの伝統やシステムが相互に作用する永続的な「歴史構造」としての文明の問題〔Singer 1959 : 610〕をあらかになしよとした意図がかいまみられる。しかし、彼の試みは、二つの伝統やシステムの概念的な枠組みを示したにすぎなかつた。

道徳的秩序と技術的秩序の⁽⁴⁾構造的関連の問題もまた、大きな伝統と小さな伝統の相関関係とおなじように、つきつめた議論がないままに終わつてゐる。道徳的秩序とは、善なるものにかんする確信や理想像、善悪観の類似性をとおして、人間をまとめてゆくすべてのもので、情緒や道徳、良心という人間的なものに基礎を置き、人びとが親密に関係しあう集団内にあらわれる。これに対して技術的秩序は、人間の情緒にもとづいて特徴づけられるものではなく、相互の有用性とか強制などによつて生まれ、この秩序のもとで、人びとはものによつてむすばれ、また、彼ら自身ものともみなされてゐる

[レッドフィールド 1978: 27-28]。

注目したいのは、レッドフィールドが二つの秩序を民俗社会と文明（都市社会）に対比させて、民俗社会では、道徳的秩序が大きな比重を占め、技術的秩序の占める割合が小さい、あるいは、道徳的秩序が技術的秩序に優越する、他方、文明では、技術的秩序はかならずしも道徳的秩序に優越するとはいえず、二つの秩序の関係が多様で、複雑である、と述べている点である。「レッドフィールド 1978: 30-32」。この解釈は、レッドフィールドと同時代の、アメリカの社会学者 H・W オーダムのフオークウェイズ (folkways) とテクニクウェイズ (technicways) についての議論を思い起こさせるが、おそらくレッドフィールドは、当時、民俗社会と文明（都市社会）の統合原理をめぐって思索をめぐらし、オーダムらの一連の議論を視野に入れながら、これを道徳的秩序と技術的秩序という概念でとらえなおしたのであらう。

なお、レッドフィールドは別の機会で、再び二つの秩序の問題を取りあげ、道徳的秩序を善なるものにかんする共通の価値を共有する人びとの関係のシステム、技術的秩序を道徳的でない人びとのあいだの関係のシステムと規定し、農民は相対的に均衡のとれた道徳的秩序と技術的秩序のもとにいる人びとと述べている [Redfield 1962c: 290-292]。この二つの秩序の構造的関連や大きな伝統と小さな伝統の相関関係の問題は、その後、レッドフィールドによって本格的に検討されることがなかったが、大きな伝統と小さな伝統という分析枠組みは、一九七〇年代までは、南アジアや東南アジアの宗

教と社会を総体として理解する枠組みとして、有効性をもちつづけていた。

二 民俗文化論の展開

1 社会と文化の不連続性

レッドフィールドの連続的变化論は、G・M・フォスター [1953, 1961-62a] や M・J・ハースコヴィッツ [1948]、G・A・ヒラリー [1968]、家坂和之 [1956, 1959]、O・ルイス [1960-61, 1963, 1970a]、H・マイナー [1952, 1968]、S・W・ミンツ [1953, 1954]、L・ライスマン [1968]、G・スジエバーグ [1952]、S・タックス [1939, 1941]、E・R・ウルフ [1964] などによって批判的に検討されているが、ここではルイスの批判を手がかりにして、レッドフィールド理論の再検討をこころみたい。ルイスは、レッドフィールドの調査から一七年後に、テポストランを訪れて本格的な実地調査をおこない、その成果にもとづいてレッドフィールド理論の批判をしているが、それは六つの点からなる。第一は、社会変化を都鄙 (toki-niban) という対立概念でとらえるのは、都市を変化の源泉とみなし、他の内的・外的要因を排除もしくは無視することになる。第二は、文化変化は民俗文化から都市社会への移行の問題ではなく、文化要素の異質性の増大もしくは減少の問題である。第三は、民俗文化の概念規定に用いられた基準のうち、あるものは関連変数もしくは従属変数としてあつかわれているが、

いずれも独立変数として取りあつかわれたほうがよい。第四は、社会を民俗社会と都市社会に類別する二分法は、いわゆる未開人の生活様式や価値体系についての成果をばやかしてしまふことになる。第五は、都鄙二分法は、範疇そのものが選択的意味をもち、また、問題点がせまいために、野外調査の指標として大きな制約をとまう。第六は、都鄙二分法の根底には、未開人を高貴な野蛮人とするルソー的思想や文明は人間を墮落させるといふ、価値判断がひそんでいる [Lewys 1963: 432-435, 1970a: 50]。

いずれも、民俗社会から都市社会への連続的变化の過程に焦点をすえた、レッドフィールド理論に対する批判であるが、マイナーは、こうしたルイスが挙げた六つの点を総括して、レッドフィールドの連続的变化論には、適合性の欠如や析出した社会や文化の諸特徴を規定する基準、理論的洞察の限定性という弱点がある、と述べている [Miner 1962: 535-537]。また、ルイスの批判のなかの第一の点は、ライスマンによっても指摘され、レッドフィールド理論の重大な欠陥は、都市社会を民俗社会の対比物もしくは民俗社会をひきたてるものとして使うだけで、都市社会それ自体の主要な要素を指摘していない、と批判されている [ライスマン 1968: 151]。また、第四と第五の点は、フォスターも指摘し、都市と非都市という極概念によつて、民俗社会や民俗文化を規定するのは、野外調査をステレオタイプ化し、社会の特徴をばかしかねない、と述べている [Foster 1953: 164]。

このほかに、ミンツのように、経験的事実にもとづいてレッドフィールド理論を具体的に批判した

ものもある。彼はプエルトリコの砂糖黍栽培を中心とする地域社会の調査をおこない、これを民俗社会でも都市社会でもない、新しい型のプロレタリア社会と規定した [Mintz 1953: 140-142]。スジョバークは、レッドフィールドの民俗社会の概念を、産業化も都市化もされていない地域社会に無差別に適用するのはつつしむべきだとして、アジアやヨーロッパなどの複雑な社会を理解するためには、民俗社会よりも「封建社会」という型を考えたほうがよいと主張している [Sjoberg 1952: 231-239]。

こうした一連のレッドフィールド理論に対する批判のほかに、注目したいことがひとつある。それは、ルイスが取りあげた第三の変数の問題である。レッドフィールドが、民俗社会から都市社会への連続的变化を説明するために、一〇の変数を摘出し、また、彼が民俗社会の孤立性と同質性を独立変数、解体と世俗化、個人化を従属変数とみなしたことはすでに指摘したが、そのなかで彼の関心は、もっぱら従属変数に向けられていた [Hillery Jr. 1968: 109]。このことは、ミンツが指摘したように、レッドフィールドが、社会や文化の構造よりは、その変化の過程に関心をもっていたからであろう [Mintz 1954: 87]。

ところで、レッドフィールドの変数の取りあげ方を検討する場合、彼が変数の内容をどのようにとらえていたのか、という点に留意する必要がある。たとえば、独立変数とみなした同質性とは、彼によると、人びとがおなじ伝統を共有し、よい生活に対しておなじ見方をもつことであるという「レッドフィールド」(1978: 20)。また、従属変数とみなした解体とは、文化の解体とか文化的解体のことで

あやが [Redfield 1964: 154, 344]、これは、個人に与えられた知識や行動の選択範囲の増大や分業にもとづく組織体の規模や複雑さの増大、慣習にもとづく制度やその理解に依存する度合いの減少を内容としている [Redfield 1964: 154]。世俗化は、文字どおり宗教的な信仰や行事の衰退を意味している。主食のトウモロコシが宗教的意味を失って、食料とか貨幣を獲得する手段になることや、守護聖人に対する信仰の衰微、家庭祭祀の消失、受洗や結婚の宗教性の喪失などを内容としている。個人化は、共同体の社会的機能の相対的な衰退や土地に対する私有権の発達、共同労働や共同祭祀の減少もしくは消失などのほか、世俗化の特徴ともされた守護聖人信仰や家庭祭祀の衰微などが指摘されている [Redfield 1964: 352-355]。

以上が、レッドフィールドの独立変数と従属変数の内容である。世俗化と個人化のように、部分的に重複しているものもあるが、共通しているのは、彼が分析上、社会関係もしくは社会組織という社会の次元と、そこに表象される意味やシンボルの統合された文化の次元を区別しないで、二つの次元の諸特徴を変数の内容としている点である。その結果、変数の内容が錯綜し、変数の相互関係が不明瞭になっている。こうした難点を克服するには、観察されるさまざまな特徴を、分析上、社会と文化という二つの次元に分けて、それぞれの次元の諸変数を検討することが必要であろう。

その意味で、レッドフィールドのユカタン研究とおなじころ、グアテマラのインディアン社会と文化の関係を分析して、両者がかならずしも連関していないと主張したタックスの議論は注目し値す

る。彼によると、グアテマラのインディアンは、ユカタンのそれよりも未開部族に似ているが、彼らの社会は都市に似て流動的で、また、人間関係も非人格で、世俗化がかなりすすんでいるという [Tax 1939: 46-47]。そしてタックスは、未開と文明という二分法にもとづいて、彼らの世界観を未開型、社会関係を文明型と規定し、彼らの社会が未開でも文明でもなく、錯綜した形で均衡をたもっていることに着目した。

ちなみに、タックスの世界観とは、自然と人間についての知識や信仰のすべてを含む実在にかんする認識、また、社会関係とは、人びとのあいだの制度化された社会や経済、政治、宗教の諸関係のことである。グアテマラのインディアン社会では、アニミズムの信仰がゆきわたり、太陽や土地などの自然が人格化されている。これに対して、人間関係は非人格的で、人びとの社会的・経済的・政治的・宗教的な関係も実際的で、世俗的精神によって支えられているという。そしてタックスは、彼らの文明化された社会関係は、彼らの文明化される世界観の発達にとって必要条件ではあるが、十分条件ではない、と述べている [Tax 1941: 37-41]。つまり彼は、社会関係と世界観という、人間生活の社会的次元と文化的次元が、かならずしも連関するものではないと主張し、フォスターも指摘したように、両者を独立変数とみなしたわけであるが [Foster 1953: 161]、こうした視点にもとづいて、宗教と社会変化の関係を分析したのはC・ギアーツであった。

ギアーツは、機能主義理論を批判して、人間生活の文化的側面と社会的側面を分析上、区別するこ

とを主張する。彼によると、文化とは人間が自分の経験を説明し、行動の指針とするための意味の枠組み、社会の構造とは、社会関係のネットワークのことである。そして彼は、両者のあいだになんらかの根源的な不連続性があつて、そのなかに変化をひき起こすいくつかの動因が隠されている、と想定する。ギアーツは、こうした視点にもとづいて、一九五〇年代のはじめに、インドネシアのジャワの小都市で起こった少年の死とその葬儀を取りあげ、葬儀が社会的緊張と葛藤を生み出した原因として、文化的意味体系（文化）と社会的相互作用の型（社会）との不調和、都市的社会環境のなかで、農村の社会構造に適合した宗教的なシンボル体系に固執することによって生じた不調和と解釈して、文化と社会の構造は、一方が他方の反映であるような関係にあるのではない、むしろ、それぞれ独立の、しかも、相互に依存した変数である、とむすんでいる〔ギアーツ 1987: 246-288〕。山下晋司も、こうしたギアーツの議論が、現在のスラウェシのトラジャの儀礼を考えるうえで、有力な視点を提供していると述べて、これを高く評価し、社会の拡大（変化）が、かならずしも文化伝統の衰退を意味しない、社会的・経済的变化と文化の関係は単純な対応関係にはない、と主張している〔山下 1988: 263-264〕。

二人の議論は、文化と社会もしくは宗教と社会変化の問題を検討する場合、傾聴すべきものであるが、そのなかでとくに着目したいのは、ギアーツが、文化と社会のあいだに、なんらかの根源的な不連続性が内在し、そのなかに変化をひき起こす諸動因がひそんでいるとみなし、両者が独立変数であ

ると同時に、相互依存変数でもある、と解釈した点である。この解釈は、レッドフィールドの文化と社会の連続的変化やタックスの世界観と社会関係にかんする視点を大きく発展させたもので、文化と社会の関係のメカニズムが、かなり錯綜していることを示唆しているのが興味をひく。

筆者もまた、かつて山梨県下の同族制村落における宗教と社会¹⁾経済変化の關係のメカニズムを、親族と村落の二つのレヴェルで検討し、つぎのようなことを指摘したことがある。親族レヴェルでは、同族の宗教的シンボルとしての山の神の信仰とその祭りが、同族結合の弱体化にともなうて衰退しているが、村落レヴェルでは、農家の兼業化や脱農化をまねいた経済的变化に呼応して、山仕事に従事する人びとが組織した山の神講の行事（ヒマチ）が衰微したが、他方では、新しく創出された行事が、既存の行事体系のなかに組み込まれ、行事体系の再編成がおこなわれている、ということである〔伊藤 1978: 146-147〕。宗教と社会²⁾経済変化が、ここでは連関変数であると同時に、それぞれ独立変数という関係にあるが、ギアーツが提起した問題は、今後、実証的研究をとおして再検討しなければならないまい。

2 実在としての民俗文化

レッドフィールドが、クローバーの見解を受け入れて、農民社会を部分文化をもった部分社会と規定し、この社会が自律性を欠き、外部世界との接触・交流を存立の条件にしている点で、歴史をもつ

た文明のひとつの側面もしくは次元とみなし、これを都鄙連続体の中間に位置づけたことはすでに述べた。こうした視点が、彼の内部で肉づけされたのは一九五〇年代のことであるが、当時、アメリカの人類学者は、政府のニュー・デイル政策や善隣政策の支援を直接または間接に受けて、メソアメリカの農民社会とその文化の研究を推進していた。レッドフィールドもそのひとりであったのは、あらためていうまでもない。

レッドフィールド以降、この地域の農民社会とその文化の研究は、L・A・ファラーズ [1967] や J・M・フィッチェン [1961]、G・M・フォスター [1960-61a, 1960-61b, 1967a, 1967b]、O・ルイス [1960-61, 1970b]、J・ロベリート [1962]、J・M・ボッター [1967]、E・R・ウルフ [1955, 1972] などによってすすめられたが、そのなかで注目したい点が二つある。

そのひとつは、ほとんどの人類学者が、レッドフィールドとおなじように、農民社会を部分文化をもった部分社会と解釈したクローバーの規定を継承している点である。いまひとつは、一部の人類学者が、クローバーの視点を再解釈して、農民社会をより大きな社会システムのなかの統合された部分として位置づけている点である。たとえば、ファラーズは、農民社会を部族社会や近代産業社会と区別し、これを半自律的文化をもった半自律的地域社会 (semi-autonomous local communities) と規定し、農民文化を「高文化」の多くの要素を再解釈し、また、再統合したものとしてとらえている [Fallers 1967: 36, 39]。ウルフもまた、農民社会が全体としての社会や文化に統合されたもので、その文化は、

より大きな統合的全体にかかわる部分文化である、と述べている [Wolf 1955: 454-455]。

いずれも、農民社会もしくは農民文化を、より大きな社会システムの部分ととらえているが、こうした一連の議論のなかで、とりわけ興味深いのは、レッドフィールドの都鄙連続体論を批判して、民俗社会と農民社会、民俗文化と農民文化を同一視し、民俗社会を理念型から実在のレヴェルにひきもどしたフォスターの見解である。彼は、レッドフィールドが「未開」と「フォーク」を同義語として用いたが、未開文化はすくなくとも理論上、それ自体が完結し、孤立したものであるから、フォーク・カテゴリーから排除されるが、民俗文化は、ながい歳月をとおして文明とたえず接触し、洗練された知的構成要素を組み入れているところから [Foster 1953: 163-164]。こうして民俗文化と未開文化を概念上、明確に区別したフォスターは、民俗文化を広義にとらえ、それが村や町、都市に住む人びとの共通した生活様式、また民俗社会は、民俗文化によって特徴づけられた人びとが組織した集団で、民俗文化と民俗社会は別々に存在しない、と主張した [Foster 1953: 170]。

レッドフィールドが都鄙連続体論を構築するために、理念型として設定した民俗社会という概念は、フォスターによって実在する農民社会に一致するものとみなされ、その後、同義語として使用されるようになるが [Foster 1960-61a: 174-175, 1967a: 4]、フォスターがとくに強調したのは、民俗社会とか農民社会が、いずれも国家や都市社会という、より大きな社会システムのなかに位置づけられ、しかも、双方のあいだに相互作用が繰り返されている、ということであった。この点について、彼は

つぎのようなことを述べている。

民俗社会は、それ自体として完結し、孤立した社会ではない。これは、垂直的にも水平的にも構造化されている、より大きな社会単位（国家）の部分で、「半社会」（“half society”）である。このより大きな単位に含まれるフォーク的構成要素は、都市の上層によって形成された、より複雑な構成要素と共生関係をもっている。その意味で、都（urban）と鄙（folk）は対立概念ではない。むしろ、両者は社会システムの統合的部分である。民俗社会の研究には、それを部分とした都市を含む国民文化（national cultures）の歴史や構造、内容について、十分、知る必要がある、というのである [Foster 1953: 163]。

フォスターは、民俗社会とその文化を国家や国民文化という、より大きな社会文化システムの部分に組み込んだわけであるが、こうした視点は、直接、農民社会をとりあげた議論のなかにもみられる。農民がひとつの部分になっている、より大きな社会は都市社会である。その都市社会は、宗教的・政治的・商業的・知的エリート集団によってもたらされた文明でもある。農民社会を規定する場合に大切なのは、生業よりはむしろ構造的な基準であって、村落と都市の関係を重視する必要がある、というのである [Foster 1967a: 8, 1967b: 7]。

以上が、フォスターの民俗文化「社会論」のあらすじであるが、彼がいわゆる「未開社会」や「未開文化」をフォーク・カテゴリーから排除して、民俗社会とその文化を国家や国民文化という、より大

きな社会文化システムの部分に組み入れ、双方の關係のあり方に視点をすえたのは注目に値する。半世紀ほど前から、「脱未開社会」化という現実に直面した人類学者によつて、まゑに述べたように、「未開」の諸村落が国家や都市という、より大きな枠組みのなかに位置づけられ、双方の相互作用を重視する視点が強調されるようになってゐるからである。その意味で、フォスターなどの民俗社会文化論は、こうした視点を先取りしたものといつてよいだろう。

おわりに

民族誌研究が現在、置かれてゐる状況を念頭に入れて、筆者は一九三〇年代から一九六〇年代にかけての、アメリカの一部の人類学者が注目した民俗文化論の再検討をこころみてみたが、今後、視野に入れて配慮しなければならない点がいくつかある。フォスターが民俗社会と同一視した農民社会が、国家や都市という、より大きな社会システムのなかで、これまで産業化や都市化によつて急激な変化を遂げていることが、そのひとつである。こうした社会では、市場のネットワークが拡大して農業の商業化が促進され、生計を維持するために作物を生産し、その一部を市場でほかのものと交換してゐた農民 (peasants) が、利潤の獲得をめざして再投資をおこなう農業経営者 (farmers) に変貌してゐる。日本の場合も、例外ではない。半世紀以上も前に、熊本県下の須恵村を調査したアメリカの人類学

者J・F・エンブリーは、農民社会が「前文字社会」の特徴をそなえていると同時に、より単純な社会と異なつて、より大きな国家の部分であると指摘したが [Embree 1939: xv]、戦後の日本の農村社会も、世界各地の農民社会とおなじように、より大きな世界的規模の政治・経済・科学技術・文化のシステムのなかに組み込まれ、ことに一九六〇年代以降、急激な変化を遂げている。近年、日本の各地で民俗誌の編纂が活況を呈しているようだが、そのほとんどが行政主導のもとですすめられ、また、どの民俗誌も地域社会をひとつの完結した社会にとらえ、これを国家や都市という、より大きな社会システムのなかに位置づけ、双方の相互作用に視点をすえたものは皆無にひとしい。こうした点は、今後、あらためて検討する必要がある。

註

- (1) いまから一八年前、宗教と社会変化の問題を取りあげた際、R・レッドフィールドの民俗文化論の骨組みを検討したことがある [伊藤 1978]。ここに、その再検討をこころみたのは、二つの理由による。そのひとつは、近年、異文化研究にたずさわる民族学者 (文化人類学者) のあいだで、研究対象の「脱未開社会」化が指摘され、従来の視点に大幅な転換の必要なきことが強調されている点に注目したからである。いまひとつは、自文化の研究にたずさわる、日本の一部の民俗学者のあいだで、これまでほとんど議論がおこなわれないまま、「民俗文化」とか「民俗社会」という用語が、安易に用いられているのが気になっていたからである。ここでは、こうした点に留意しながら、民俗文化や民俗社会の再検討をこころみたい。

なお、本稿で取りあげた民俗文化は *folk culture*、民俗社会は *folk society* の訳語である。この訳語をはじめて使用したのは及川宏であるが、彼はレッドフィールドの規定を採用して、民俗社会を「民間伝承が保存され、民謡が誦され、民俗慣行が人々の行動の準則となる文化共同体」とみなしている [及川 1967: 132]。ちなみに、家坂和之は *folk society* に「小社会」という訳語をあてている [家坂 1956: 12]。

- (2) レッドフィールドは、その翌年に発表した論文のなかでも、これとおなじような見解を示し、民俗社会が小さな社会であると述べている [Redfield 1943: 70]。小さな社会という概念は、その後、彼の内部ではぐくまれ、自律性や小規模性、同質性、自給自足性という特徴によって性格づけられるようになった [Redfield 1965: 10]。

- (3) フォークウェイズ (*folkways*) は、アメリカの進化主義社会学者 W・G・サムナーの造語である。彼は、二〇世紀のはじめに、この造語を表題にした『フォークウェイズ』(一九〇六)を公にした。サムナーによると、フォークウェイズとは、「欲求を充足しようとする努力からおこってくる個人の習慣であり、社会の習慣」のことで、これに生活の福祉と関係した信念が加わるとモーリーズ (*mores*) になるが、モーリーズに哲学的・倫理的要素がくわわると、モーリーズは、有用性と重要性をちとり、科学の源泉や生活の技術になるという [サムナー 1975: 4, 9]。このフォークウェイズについて、J・G・レイバーンは慣習的行為と解釈しているが、もっと正確にいうと、レッドフィールドが述べているように、慣習化された行動様式 [Redfield 1962b: 240-241] とういうことになる。なお、*mores* はラテン語で、訳者はモーレスと表記しているが、今日、アメリカでは、この語は日常語化し、モーリーズと発音されているので [本間 1975: 15-16]、ここではモーリーズと表記することにした。サムナーの社会進化思想については、R・ホフスターの研究 [973] が参考になろう。

サムナーのフォークウェイズという概念は、その後、アメリカの一部の社会学者に大きな影響を与えた。

H・W・オーダムはそのひとりで、彼は、レッドフィールドとおなじように、二分法にもとづいて、自然社会と技術社会、民俗社会と国家社会、民俗文化と国家文明などという対立概念を設定し、フォークウェイズが自然社会、民俗社会、民俗文化に根ざしているのに対して、科学技術が高度に発達した近代の技術社会、国家社会、国家文明の基盤には、フォークウェイズにかわってテクニクウェイズ (technicways) が存在する、と主張している。ちなみに、テクニクウェイズは、サムナーのフォークウェイズの対立概念として、オーダムが考えた造語で、彼によると、これは技術への適応様式であるとともに、その結果、生まれた行動であるという [Odum 1937: 336-346, 1943: 390-396, 1947: 225-230, 260-269, 1953: 193-223]。こうしたフォークウェイズとテクニクウェイズの関係は、オーダムのほかに、A・ボスコフ [1949] やA・デーヴィス [1940a, 1940b]、H・T・エルドリッジ [1943] などによっても取りあげられているが、いずれも自然社会と技術社会、民俗社会と国家社会の対比的な議論に終始している。こうした一連の議論とは別に、フォークウェイズにかわってハビッツウェイズ (habits-ways) という分析概念を提唱し、この概念のほうが文化変化論に有効である、という議論もみられる [Cousins & Oren Jr. 1947]。レッドフィールドのフォークウェイズとシティウェイズの対比は、おそらくこうした議論を視野に入れたものといつてよいだろう。

(4) 道徳的秩序と技術的秩序は、moral order と technical order の訳語である。染谷臣道と宮本勝は、解説のなかで、レッドフィールドが moral の意味内容をかなり拡大しているので、「道徳的な」という訳語が不適切であるとし、ためらいを感じながら、これに「精神」という訳語をあて、moral order を精神相、これに対立する technical order を技術相と翻訳した「レッドフィールド 1987: 198」。ここでは、レッドフィールドの用語法をすなおに受け入れて、moral order には道徳的秩序、technical order には技術的秩序という訳語をあてた。

(5) H・W・オードムの folkways と technicways についての議論は、註(3)を参照されたい。

文獻

- Agehananda Bharati, S.
1978 *Great Tradition and Little Traditions: Ideological Investigations in Cultural Anthropology*. Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office.
- Boskoff, A.
1949 Structure, Function, and Folk Society. *American Sociological Review* 14(6): 747-758.
- Cousins, W. J. & P. Oren Jr.
1947 Habit-ways: A Footnote to Sumner. *Social Forces* 25(4): 416-418.
- Davis, A.
1940a Technicways in American Civilization: Notes on a Method of Measuring their Point of Origin. *Social Forces* 18(3): 317-330.
1940b Times and Technicways: An Experiment in Definition. *Social Forces* 19(2): 175-189.
- Eldridge, H. T.
1943 The Implications of Regionalism to Folk Sociology with Illustration from the Southern Regions. *Social Forces* 22(1): 41-43.
- Embree, J. F.
1939 *Suye Mura: A Japanese Village*. Chicago: University of Chicago Press.
- Fallers, L. A.

- 1967 Are African Cultivators to be called Peasants? In J. M. Potter, M. N. Diaz & G. M. Foster (eds.), *Peasant Society: A Reader*. Boston: Little, Brown & Co., pp. 35-41. (Originally published in 1961).
- Fitchen, J. M.
 - 1961 "Peasantry" as a Social Type. In V. S. Garfield (ed.), *Symposium: Pattern of Land Utilization and Other Papers*. Proceedings of the 1961 Annual Spring Meeting of the American Ethnological Society. Seattle: University of Washington Press, pp. 114-119.
- Foster, G. M.
 - 1953 What is Folk Culture? *American Anthropologist* 55(2): 159-173.
 - 1960-61a Interpersonal Relations in Peasant Society. *Human Organization* 19(4): 174-178.
 - 1960-61b A Rejoinder to the Comments. *Human Organization* 19(4): 183-184.
 - 1967a Introduction: What is Peasant? In J. M. Potter, M. N. Diaz & G. M. Foster (eds.), *Peasant Society: A Reader*. Little, Brown & Co., pp. 2-14.
 - 1967b *Tzintzuntzan: Mexican Peasants in a Changing World*. Boston: Little, Brown & Co.
- キーン・C
 - 1987 『文化の解釈学』 I 吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳、岩波書店
- Herskovits, M. J.
 - 1948 *Man and His Works*. New York: Knopf.
- Hillery Jr. G. A.
 - 1968 *Communal Organization: A Study of Local Societies*. Chicago & London: University of Chicago Press.

ホフスター・R

1973 『アメリカの社会進化思想』 後藤昭次訳、研究社。

本間長世

1975 「社会進化論とアメリカ」『社会進化論』（アメリカ古典文庫8）研究社、pp. 55-24.

Hultkrantz, A.

1960 *General Ethnological Concepts*. Copenhagen: Rosenkilde and Bagger.

家坂和之

1956 「所謂 Folk-urban Continuum 論小考」『社会学研究』12: 9-27.

1959 「小社会の視点と構造態勢」『社会学の方法と問題』有斐閣、pp. 231-256.

伊藤幹治

1978 「制度としての宗教」井門富二夫編『講座宗教学』3（秩序への挑戦）pp. 107-157.（理論的枠組み」として再録『宗教と社会構造』弘文堂、1988, pp. 1-41).

Kroeber, A. L.

1923 *Anthropology*. New York: Harcourt, Brace.

Lewis, O.

1960-61 Some of My Best Friends are Peasants. *Human Organization* 19(4): 179-180.

1963 *Life in a Mexican Village: Tepoztlán Restudied*. Urbana: University of Illinois Press. (Originally published in 1951).

1970a Tepoztlán Restudied: A Critique of the Folk-Urban Conceptualization of Social Change. *Anthropological Essays*. New York: Random House, pp. 35-52. (Originally published in 1953).

- 1970b
Introductory Remarks. *Anthropological Essays*. New York: Random House, pp. 251-254.
- Leyburn, J. G.
1968
Sumner, William Graham. In David L. Sills (ed.), *Encyclopedia of the Social Sciences* 15, New York: The Macmillan & The Free Press, pp. 406-409.
- Lopreato, J.
1962
Interpersonal Relations in Peasant Society: The Peasant's View. *Human Organization* 21(1): 21-24.
- Marriott, M.
1960
Little Communities in an Indigenous Civilization. In C. Leslie (ed.), *Anthropology of Folk Religion*. New York: Alfred A. Knopf & Landon House, pp. 169-220. (Originally published in 1955).
- 松本通晴
1959
「アメリカにおける村落研究の方向(下) — C・D・ルーニンとR・ランドフィールドを中心として」『人文学』42: 61-88.
- Miner, H.
1952
The Folk-Urban Continuum. *American Sociological Review* 17(5): 529-537.
- 1968
Community-Society Continua. In David L. Sills (ed.), *Encyclopedia of the Social Sciences* 3, New York: The Macmillan & The Free Press, pp. 174-180.
- Mintz, S. W.
1953
The Folk-Urban Continuum and the Rural Proletarian Community. *The American Journal of Sociology* 59(2): 136-143.
- 1954
On Redfield and Foster. *American Anthropologist* 56(1): 87-92.

Odum, H. W.

1937 Notes on the Technicways in Contemporary Society. *American Sociological Review* 2(3): 336-346.

1943 Sociology in the Contemporary World of Today and Tomorrow. *Social Forces* 21(4): 390-396.

1947 *Understanding Society: The Principles of Dynamic Sociology*. New York: The Macmillan.

1953 Folk Sociology as a Subject Field for the Historical Study of Total Human Society and the Empirical Study of Group Behavior. *Social Forces* 31(3): 193-223.

大塚和夫

1995 『テキストのマフィイズム・スーダンの「土着主義運動」とその展開』東京大学出版会

及川宏

1967 「社会人類学派の村落調査についてー共同体分析の若干の問題」『同族組織と村落生活』未来社、

pp. 129-146. (初出 1944) :

Potter, J. M.

1967 Introduction: Peasants in the Modern World. In J. M. Potter, M. N. Diaz & G. M. Foster (eds.),

Peasant Society: A Reader. Boston: Little, Brown & Co., pp. 378-383.

Redfield, R.

1930 *Tepoztlam: A Mexican Village, A Study of Folk Life*. Chicago: University of Chicago Press.

1934 Culture Changes in Yucatan. *American Anthropologist* 36(1): 57-59.

1943 Rural Sociology and Folk Society. *Rural Sociology* 8(1): 68-71.

1955 Societies and Cultures as Natural Systems. *Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 85: 19-32.

- 1962a Folkways and City Ways. In M. P. Redfield (ed.), *Human Nature and the Study of Society: The Papers of Robert Redfield* Vol. I, Chicago & London: University of Chicago Press, pp. 172-182. (Originally published in 1935).
- 1962b The Folk Society. In M. P. Redfield (ed.), *Human Nature and the Study of Society: The Papers of Robert Redfield* Vol. I, Chicago & London: University of Chicago, pp. 231-253. (Originally published in 1942).
- 1962c Tribe, Peasant, and City. In M. P. Redfield (ed.), *Human Nature and the Study of Society: The Papers of Robert Redfield* Vol. I, Chicago & London: University of Chicago, pp. 282-294. (Originally published in 1961).
- 1962d The Natural History of the Folk Society. In M. P. Redfield (ed.), *Human Nature and the Study of Society: The Papers of Robert Redfield* Vol. I, Chicago & London: University of Chicago, pp. 294-302. (Originally published in 1953).
- 1962e Community Studies in Japan and China: A Symposium. In M. P. Redfield (ed.), *Human Nature and the Study of Society: The Papers of Robert Redfield* Vol. I, Chicago & London: University of Chicago Press, pp. 302-310. (Originally published in 1954).
- 1964 *The Folk Culture of Yucatan*. Chicago & London: University of Chicago Press. (Originally published in 1941).
- 1965 *The little Community and Peasant Society and Culture*. Chicago & London: University of Chicago Press. (Originally published in 1960).
- 1967 The Social Organization of Tradition. In J. M. Potter, M. N. Diaz & G. M. Foster (eds.), *Peasant*

Society: A Reader, Boston: Little, Brown & Co., pp. 25-34. (Originally published in 1955).

レッドフィールド・R

1960 『文明の文化人類学—農民社会と文化』 安藤慶一郎訳、誠信書房（初出、1956）

1978 『未開世界の変貌』 染谷臣道・宮本勝訳、みすず書房（初出、1953）

ライスマン・L

1968 『新しい都市理論—工業社会の都市過程』 星野郁美訳、鹿島出版会（初出、1964）

清水昭俊

1992 『永遠の未開文化と周辺民族—近代西欧人類学史点描』 『国立民族学博物館研究報告』 17(3): 417-488.

Singer, M.

1959 Robert Redfield, *Anthropologist*. *Science* 130: 609-610.

1960 The Great Tradition of Hinduism in the City of Madras. In C. Leslie (ed.), *Anthropology of Folk Religion*. New York: Alfred A. Knopf & Random House, pp. 103-166. (Originally published in 1958).

1972 *When a Great Tradition Modernizes: An Anthropological Approach to Indian Civilization*. Chicago: University of Chicago Press.

Sjoberg, G.

1952 Folk and "Feudal" Societies. *The American Journal of Sociology* 58(3): 231-239.

サムナー・W・G

1975 『フォークウェイズ』（現代社会学大系3）青木書店、青柳清孝・園田恭一・山本英治訳

Tax, S.

- 1939 Culture and Civilization in Guatemalan Societies. *The Scientific Monthly* 48: 463-467.
1941 World View and Social Relations in Guatemala. *American Anthropologist* 43(1): 27-42.
Wolf, E. R.
1955 Types of Latin American Peasantry: A Preliminary Discussion. *American Anthropologist* 57(3): 452-471.
1964 *Anthropology*. Englewood: Prentice-Hall.
ウルフ・E・R
1972 『現代文化人類学』Ⅰ(農民) 佐藤信行・黒田悦子訳、鹿島出版会。
山下晋司
1985 『儀礼の政治学—インドネシア・トラジャの動態的民族誌』弘文堂。

〔付記〕 本稿は、平成七年度成城大学教員特別研究助成費による成果の一部である。